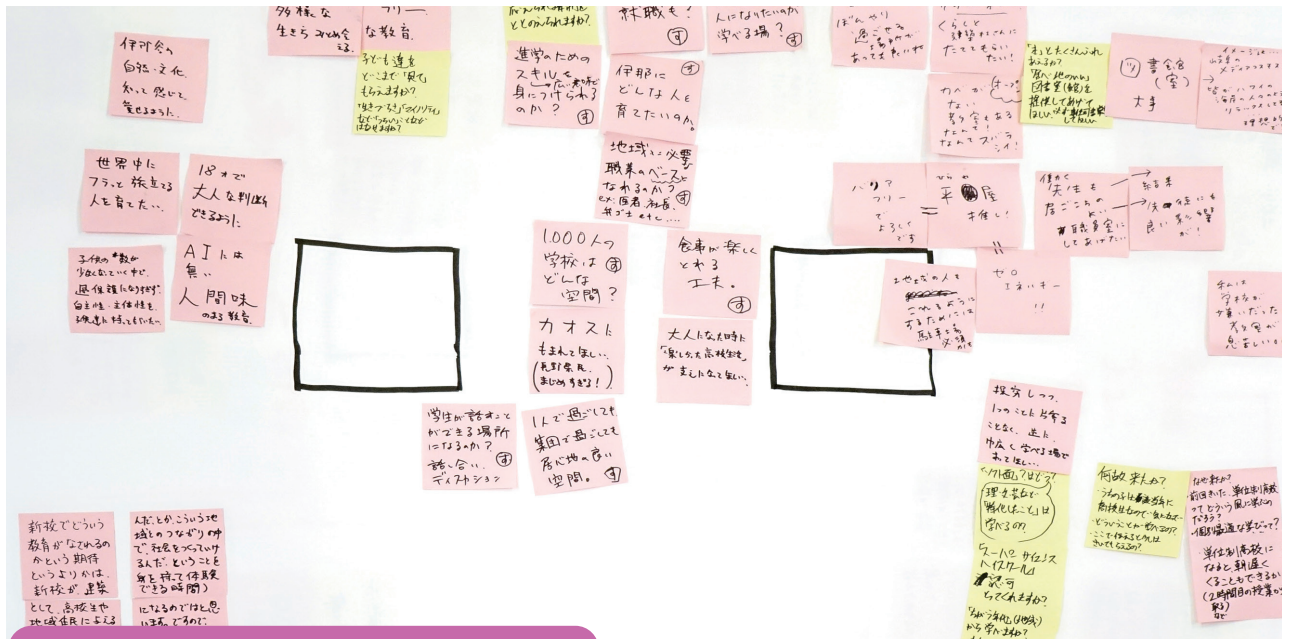


Thinking&Talking about New High-School!

第二回 みんなで伊那新校の学習空間を考えよう

地域



●参加者
上伊那地域にお住まいのみなさん
+ 設計JV チーム 合計 40 名

3/27 (月) 【第二回 伊那新校ワークショップ】
18:00-20:00 伊那市創造館 3F 講堂

前回の進行を踏まえ、前半のインプットの説明をより丁寧に行うことで、後半のワークへと展開しやすいように心がけた。初めて参加された方もいるため、重複箇所もあるが、提供する情報・説明はより明瞭・明確にすることに留意した。

学校の春休み期間中、平日の夕方という時間帯であったが、31名の地域の方（伊那市・南箕輪村・中川村・箕輪町・岡谷市・長野市）にご参加いただいた。6名の保護者、2名の中・高校生の参加があったことで意見に多様な広がりが見られた。

●目的・趣旨

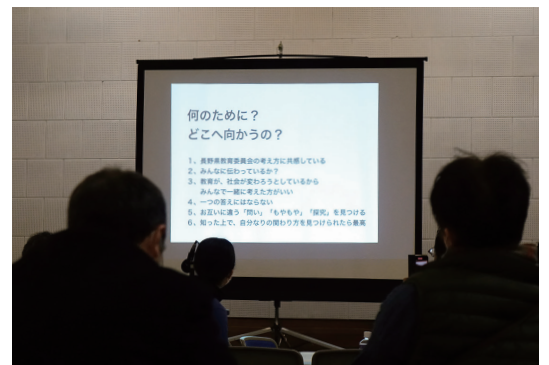
3/5 に開催した 1 回目を受けて、今回は空間や場所によらず、「時間」を軸に意見やアイデアが出るような場を心がけた。インプットでは「たしゅうしつ」を運営する高校生・立上げメンバーの思いを知ること、「学びの伴う時間」の実際例も、発想する上での契機とした。

- NSD の考える共学共創のビジョンの共有
- ワークショップによるアイデア創出のプロセス体験
- 地域と新校との接点、個人の関わり方の可能性についての意識付けの共有。方向性の提示。

↑ 保護者チームによるワーク



↑ 参加人数・属性などを踏まえ、その日の「場」を作成



↑ 地域と新校との関わりを、個人として捉え直すことを一つの軸としている

↑ A4 サイズのチラシを上伊那全域の小・中学校へ約 12,000 枚を配布。保護者の参加を促した。

●当日のフロー（前半～インプット）

1. 県教委 田中先生より NSD プロジェクトの説明

- ・これまでとは異なるプロセスである点
- ・学びと空間をともに「考えていく」共学共創ビジョン
- ・単位制の導入なども検討している

2. JV須永より基本計画策定プロセスの説明

- ・あらためて設計JV チームの紹介
- ・全体の流れの説明を図で示す
- ・NSD 会議の報告（3～5 回のテーマ提示、配置の初期段階での議論の内容など）
- ・全 4 回の機会を通じた方向性・ポイントを提示

何のために？
どこへ向かうの？

- 1、長野県教育委員会の考え方に共感している
- 2、みんなに伝わっているか？
- 3、教育が、社会が変わろうとしているから
みんなで一緒に考えた方がいい
- 4、一つの答えにはならない
- 5、お互いに違う「問い」「もやもや」「探究」を見つける
- 6、知った上で、自分なりの関わり方を見つけられたら最高

3. インプット

- ・本日の WS の位置付けと、目的の説明

事例紹介「たしゅう室」が実現する学び

●「たしゅう室」新旧運営者の紹介

立上げメンバー：井崎才蔵さん（長野県立大 2 年）

2 代目メンバー：飯島快周さん、佐野天咲さん、飯島颯士さん、小笠原汐音さん（大学進学を控えた伊那北高校卒業生）

●井崎さんより、たしゅう室の説明と立ち上げた理由や経緯の紹介

●地域コーディネーターの井崎より、たしゅう室への大人の関わり紹介

●上記をオンラインでの参加している生徒たちとのやりとりの中で話す

「たしゅう室」とは

- ・伊那北高校1年次の探究授業がきっかけ
- ・いなっせや図書館とは違う、それぞれが自由に過ごせる「自習室」として、多くの他人が集まって習う「たしゅう室」
- ・「学び合う+教えて学ぶ+気軽にきける」集まりの実現
- ・地域の大人たちに相談して、場所や建材などを確保
- ・伊那北高校・弥生ヶ丘高校の探究授業への関わり
- ・土田さん、平賀さんという地域の大人が場所を提供していること
- ・平日の夕方、自治的に活動を行う

伊那新校を考えるにあたって、「探究的な学び」と「進学校としての学び」が対極的なものとして扱われる場面が多いが、たしゅう室で過ごした生徒たちにとってはすでにそれらが両輪となって、希望進路の実現につなげている。たしゅう室はそれを生徒さんたち自身によって体現している学び合いの場であること。をポイントとして提示した。



↑ 「探究」を核とし、「個別最適な学び」を実現する単位制について説明



↑ 初めて参加いただく方にもわかりやすく NSD のビジョンを共有



↑ 設計 JV チームとしてとらえる「役割分担」や「専門性」について説明



↑ インプット、学びの実例として「たしゅう室」を紹介。



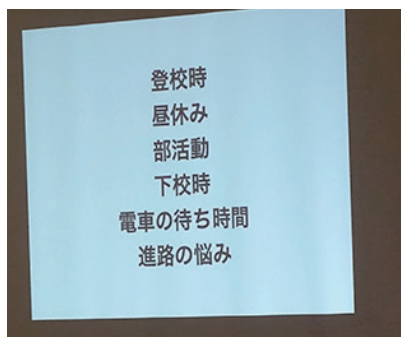
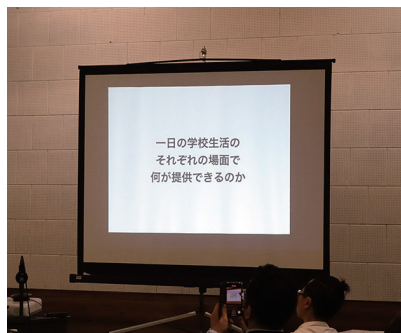
↑ 2 代目「たしゅう室」運営メンバーはオンラインで参加してくれた

●当日のフロー（後半～ワーク）

3. インプット

・瀧内より本日のWSの位置付けと、目的の説明

テーマ「新しい学校で過ごす1日をイメージしよう」

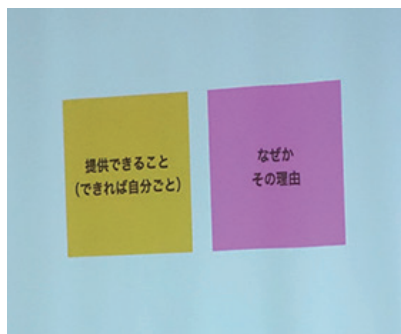


生徒が過ごす「1日の時間」を「場面」ごとに想定し、それに対して、何ができるのかを各テーブルで意見・アイデアを出していく。スライドで示したもの以外でも自由に「場面」を想定して、テーブルごとに「2つの場面」を軸に意見を出し合った。

※それぞれ保護者と生徒のみで構成されたテーブルも作り、こちらは別のテーマを設けて話し合った。

アイデア出しのルール

- ・黄色の付箋には自らが「提供できること」
 - ・ピンクの付箋には「その理由、なぜか」
- をワンセットとして模造紙に貼っていくルールとした。



↑ テーブルごとに2つの「場面」を想定し、枠内に書き込みました



↑ 上伊那の地域の方には、テーブルファシリに慣れている人が多い



↑ 選んだ「時間・場面」に対して、自分ができそうなことを提案していく



↑ 弥生ヶ丘同窓生。心暖まるエピソードで盛り上がりました。



↑ JVメンバーを含め、「保護者」として当事者チームで考えました

●全体共有

保護者、生徒、地域のみなさんの大きく 3 つのカテゴリにチームを分け、話された内容、盛り上がったポイントについて発表していただいた。

地域のみなさん（地域社会として何が出来るか）

- 「放課後・下校時」に、地域でお金を払うので「起業・探究部」「地域ヒーロー部」として生徒たちの活動をサポートする。
- 「進路の悩み」に、失敗の体験を得るためのサポーターのようなつなぎ役。
- 「一人でいる場面」に、挨拶などの声かけを行い、学校に行く楽しみを持ってもらう。
- 「放課後」に、多世代のコミュニケーションと関わる。お悩み相談箱の設置。自立した移動手段の仕組み作り。自転車の置き場所の提供。一緒に防災を考える
- 「タブーとされる話題」を話し合う場を設ける。

保護者（親として、どんな期待と不安があるのか）

- 単位制導入など、やりたいことが出来る高校になるのか不安
- 居心地の良い空間、バリアフリーなどの具体的な過ごす中の居場所が大切
- 楽しかった高校生活になるように純粋に送ってほしい。
- もっとカオスが欲しい。表面的・単一的になってほしくない。県外に比べて、長野県は真面目。

生徒たち（何が欲しいのか）

- 進路を考えるきっかけ／地元を知る／働き方を知りたい、そのために「色々な話を聞きたい」。
- 日常の中でのきっかけ、イベントなどを知る機会がない、「強制力を持っても良い／いや、苦痛だ」。
- （キャリア教育などでの）職業を知りたい、とかではない。その背景にあることを知りたい。

●総評・まとめ（ファシリテーターから）

今回のワークショップでは、時間別や出来事別での「場面」に対して、地域の皆さんが「何が出来るか」そして、「それはなぜか」を話し合いました。

出てきた付箋（意見やアイデア）を見て、各グループの発表を聞いて、「グラデーションとバリエーションである」という話をしたと思います。それは、探究的な学びや生徒たちの暮らしに対しての「バリエーション（種類）」と関わり方の「グラデーション（濃淡）」。これは個別最適な学びをつくる下支えとなっていくものです。これは、今後ずっと用意しなければならないのではなく、その時々でできることを用意し、それと生徒の意欲が、学校と地域をつなぐコーディネーターによって、マッチングされていく。それが継続的に行われていくことが大切だと思っています。

また、伊那谷の人々のやさしさにも触れました。これは、地域の「懐の深さ」につながり、学ぶ生徒たちが地域を頼る拠り所になるはず。これらが、学校 × 地域の動きに結びついていくことで「関わり方のデザイン」がさらに深まっていく、そんな新校の風景が想像できました。



↑ 生徒チームからは「リアリティのある意見」が出ました。



↑ 保護者チームからは、「新校への不安・期待」多く出していただきました。



↑ 地域のみなさんは、「自分ごと」として出来ることを捉え直していきます。